

序 説

ものみな

万物それぞれ心あり

今の世を憂え、悲しみてあらん

されど憂いを捨て、悲しみを忘れて

よみがえ

希望に 蘇 れ

今し仏眼いずるなり

人みな聞け

つく

まが

むすぼれ

悉く人の業りて、積もりたる禍つの結滞 解き放つの時至り、

仏眼いずるなり

仏眼は心の闇、身の病み、世の煩いを払う 慧智の太陽なり

それ、太陽は闇を見ることなし

向かうところ忽ちに、己が明をそこに見るのみ

あ

仏眼に和う者また、忽ちに闇を見ず

すなわち

ぐち

もと

すがた

愚痴消え、迷い晴れ、一切の罪汚れ無き、己が真の相を見るなり

今日よりは

悪を去り、邪を^{しりぞ}斥けるために、徒^{いたずら}に心身を労するなかれ
闇を無くして後、光を持ち来るに非ざる如く、
悪を去りて後、善を持ち来るに非ず

今日よりは

善を行い、正を貫くために、冗^{いたず}らに心身を労するなかれ
光は闇と^{たたか}斗うことなし
^{やすやす}易々として、光の、闇を消化する如く
仏眼のもとに斗いなし

生涯を輝かしく過^{ねが}ごさんと欲ふ者
仏眼^あに和え

四囲と^{ねが}歓びを共にせんと希ふ者
仏眼^{ひろ}を弘めよ

もろもろの厄難の無^{ねが}からんことを願ふ者
仏眼^{たも}を保て